

活動報告

「ポストコロナ時代のユニヴァーサルな街づくり」

— EXPO 2025 を見据えて —

久保雅義

Universal Urban Development in the post covid 19:

Looking ahead to EXPO 2025

KUBO Masayoshi

(2022年3月3日受付, 2022年9月30日発行)

はじめに

未踏の時代ともいえる“コロナ時代”に突入した現在、考えておかねばならないのが“ポストコロナ時代の街づくり”である。国際ユニヴァーサルデザイン協議会は、2021年3月に「新型コロナウイルス感染防止のためのデザイン」のテーマを掲げ、科学的知見を基にしたイノベーションとデザイン思考を用いて、新しい生活様式とインクルーシブな社会を論じ、世界25の国の参加のもと国際UD会議インクラウドを実施した。参加者は、500人超であった。

さらに国際ユニヴァーサルデザイン協議会は、2021年EXPO2025のTEAM EXPO2025の共創パートナーとしての活動をもスタートさせた。EXPO2025とその後の誰もが豊かで安寧な生活創造にむけて、EXPO2025テーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」を支えるインクルーシブ社会の在り方を目指すこととした。

その第一歩として筆者は、セミナーを企画しポストコロナでの変化する当事者とのかかわり方やニューノーマルという新生活様式で、どのように多様な生活者と共生できる街をつくっていかばいいのだろうか、ユニヴァーサルな街づくりの方向性について、有識者を交え論議するべきと考えた。今回タイトルは、主催の国際ユニヴァーサルデザイン協議会

にちなんで、ユニヴァーサルとしたが、内容的には前述したインクルーシブな街づくりの方がより適切と思われる。ユニヴァーサルデザインとインクルーシブデザインの使い方の差異などは以下に示す。

1. ユニバーサルデザイン¹⁾ (UD) とインクルーシブデザイン²⁾

ユニバーサルデザイン (以下UDと略す) は、年齢、国籍、性別、能力、身体的な特性等の違いにかかわらず、全ての人々が、生活の不便さを感じることなく、製品・建物・環境を出来る限り、快適に利用できるようにする概念で、ノースカロライナ州立大学³⁾ (NCSU) Donald L. Mace⁴⁾教授が提唱した。一般的に全ての人々が生活を不便なく行える製品づくり・建物・環境づくりを述べる時に使用される。

一方インクルーシブデザインは、社会的包摂を目指す概念で、インクルーシブは、「除外 (Exclude)」の対義語である「Include」が語源である。高齢者や障害者、外国人は、これまで製品のデザインプロセスの中で軽視や排除されてきた人々を、デザインの土流から巻き込んでいく手法を指す。インクルーシブデザインを提唱したのは、英国王立芸術大学院⁵⁾ (RCA) Roger Coleman⁶⁾教授である。一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会のボードメンバーで、IAUD国際デザイン賞選定の審査委員長である。

UDとインクルーシブデザインは、前者がゴールを示している、一方後者はプロセスを示し、結果として高齢者や障害者、外国人などを排除しないで、多様な人々が、生活の不便さを感じることなく、製品・建物・環境を快適に利用できるようにするという視点では同義といえる。学際的には、インクルーシブデザインを、一般的な製品・建物・環境を述べるときはUDといわれることが多いので、本篇では使い分けて表現することにする。

2. IAUD⁷⁾ (一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会)

一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会⁸⁾ (以下IAUDと略す)は、1992年設立された国内最大の参加者、参加企業からなるインクルーシブデザイン推進団体であり、総裁故三笠宮寛仁親王殿下のもと、できる限り多くの人々が快適に暮らしやすい社会の実現をめざし、さまざまな生活シーンにおいて魅力ある製品やサービスを創出するため、業種・業態を越えた共同研究プロジェクトを、生活者との対話を中心において幅広い視点で推進する目的で設立された。またインクルーシブデザインを推進する上での基準やガイドラインの構築、会員と生活者とのインクルーシブデザインに関する情報共有などに取り組んでいる。

これまで8回の国際UD会議、毎年のIAUD国際デザイン賞選定、UD検定、48時間デザインマラソンや子供UD教育プログラムなどのUD人材育成や情報発信を通して、一人でも多くの人が快適で暮らしやすいインクルーシブ社会の実現に向けて活動を進めてきている。

IAUDの基本理念は、民族、文化、慣習、国籍、性別、年齢、能力等の違いによって、生活に不便さを感じることなく、“一人でも多くの人が快適で暮らしやすい”インクルーシブ社会の実現であり、EXPO2025の理念“一層大きな自由の中で社会的進歩と生活水準の向上を促進 (SDGsの達成)”と合致する。またIAUDの基本理念は“多様性の容認”であり、2019年開催の国際UD会議 2019 in バンコクでは、SDGsがメインテーマとして論議されアジア

の発展途上国の参加者共感を得た。

第8回国際UD会議 2021 in ザ・クラウドは、感染症に対してNew Normalなライフスタイルをどう構築するかについて、世界中のインクルーシブデザイン研究者がオンラインで論議し、課題解決に向けてオンラインワークショップを開催した。

3. 「大阪・関西万博」 「TEAM EXPO 2025」⁹⁾ プログラム

2025年日本国際博覧会 (略称「大阪・関西万博」)のテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」であり、基本コンセプトはSDGs達成である。

「TEAM EXPO 2025」プログラムは、大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現し、SDGsの達成に貢献するために、国内外において多様な参加者が主体となり、理想とする未来社会を共に創り上げていくことを目指すプログラムをいう。対象は、企業、教育・学術・研究機関 (大学・研究所等)、国・政府関係機関 (独立行政法人等)、国際機関、自治体、NGO、NPO法人、各種団体など広く設定されており、参加型で大きな資本を持たなくても挑戦できるプログラムとなっている。博覧会協会が応募に対して審査し、2025年には、本プログラムから生み出された活動や輝く人を大阪・関西万博会場で紹介し、世界へ発信していく予定としている。

「TEAM EXPO 2025」プログラムは“共創パートナー”および“共創チャレンジ”から成る。“共創パートナー”は、EXPOを支える様々な活動を通じ、当プログラムにおける共創を促進する存在で、活動内容は万博協会との協議の上で決定される。パートナーに求められることは、複数の“共創チャレンジ”を創出・支援する法人・団体単位での登録が認められたもので以下の要件を満たすものとされている。

- ・自らのリソースを提供して“共創チャレンジ”を生み出す活動
- ・自らが創出した“共創チャレンジ”や他の“共創チャレンジ”を支援する活動

上記2つの活動を基本とし、他の“共創パートナー”とも連携して、「TEAM EXPO 2025」プログラムを

盛り上げる、などをもとめている。

4. IAUDと「TEAM EXPO 2025」“共創パートナー”

IAUDは、事業計画としてEXPOとの連動を掲げている。2020年のアラブ首長国連邦(UAE)ドバイ万博¹⁰⁾開催時に、ドバイで第8回国際UD会議を開催する予定であったが、コロナ禍でドバイ万博は2021年に延期され、2021年3月に第8回国際UD会議2021 in ザ・クラウドはオンライン開催となった。

実際ドバイ万博との関りは、第2回ドバイ国際アクセシブル観光サミット「Tourism for Everyone¹¹⁾」2022年1月12日(火)に、ドバイで開催され、川原啓嗣専務理事がIAUDを代表してオンライン講演を実施した。

今後の計画としては、2025年にEXPO2025「大阪・関西万博」と連携した国際UD会議を開催し、インクルーシブ社会の取り組み事例・成果を発信予定である。

そのためにIAUDは、EXPO2025がインクルーシブなEXHIBITIONになる、またそのために大阪・関西がインクルーシブな街になることを目指して活動するべきと筆者は考えた。このことは万博協会からも評価されている。

IAUDの諸活動は、インクルーシブな環境整備の“知”となるべきであり、インクルーシブデザインを適応したソリューションや方法論を用い万博ステークホルダー価値の最大化をはかり、EXPO2025「いのち輝く未来社会のデザイン」の実現を図ることが望ましい。以下IAUDが、“共創パートナー”を通して貢献できる視点である。

- (1) 多くの当事者(高齢者、障害者、子供、外国人など)が不便を感じる事案は、健常な大人、単一民族の日本が安易に見落としがちな視点を含んでいる。この課題発見と解決は、インクルーシブな社会への貴重な示唆となり力を与える。
- (2) EXPO準備に向けたインクルーシブデザイン課題を改めて確認できる。例えば、公共交通や公的建物にアクセスに関して、当事者を含めて多様な人々の“知”で検証することにより、

EXPO2025のインクルーシブアセスメントを認識でき、アクセスや展示会場の課題解決につながる。

- (3) EXPO主催者・運営側が気づいていないマナーやルールの不完全さ、配慮不足などを共有できる。“共創チャレンジ”のEXPO2025タスクフォース、夢洲万博博覧会アセスメントなどを通して広く課題共有と解決提言が可能になり「TEAM EXPO 2025」の参加型でつくりあげるEXPOを実現する。
- (4) インクルーシブなまちづくり成果を発信することで、ポストEXPO2025を見据えた都市計画の示唆を大阪・関西のステークホルダーが確認できる。このことはまさしく未来のデザインであり、EXPOを契機に変革するまちづくりを展望したい。
- (5) 改めて特定の誰かのために何かをするのではなく、多様な人間がいることの気づき、多くの当事者(障害者など)と一緒に生活していくことの必要な認識が持てることは大きい成果である。このことこそいのち輝くデザインと位置づけられる。

「TEAM EXPO 2025」“共創パートナー”の“共創チャレンジ”計画は以下である。

- ・EXPO2025UDセミナー
- ・お年寄りにやさしい施設の基準づくり
- ・UDハッカソン・アイデアソン¹²⁾
- ・EXPO2025に向けた子供UD現場教育プログラム
- ・EXPO2025UD研究会
- ・EXPO2025UDタスクフォース
- ・夢洲万博博覧会UDアセスメント
- ・特別な配慮が必要な子供との意思疎通プロジェクト
- ・視覚障害者のためのEXHIBITION

5. 「ポストコロナ時代のユニバーサルな街づくり」—EXPO 2025を見据えて—

筆者は、2021年3月、7月に「TEAM EXPO 2025」“共創パートナー”の最初のプログラム“共創チャレ

ンジ」子供UD現場教育プログラムを東大阪市の中小教員での講演会を数回実施した。

第2段のチャレンジとしてオンラインセミナー「ポストコロナ時代のユニバーサルな街づくり」を企画し、2021年11月11日(木)14:00~17:30に実施した。以下はその概況である。

- ・開催形態：ビデオ会議システム Zoom によるオンライン開催(要参加登録・無料)
- ・参加人数：技術者やデザイナー、省庁関係者、大学関係者、医療従事者など約120名
- ・情報保障：要約筆記(発言内容の文字表示)
- ・協賛：パナソニック(株)、(株)イセトール
- ・後援：大阪府、公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、大阪商工会議所、産経新聞社

なお司会は、IAUD専務理事川原啓嗣氏が担当した。川原氏は、(株)キッド・ステューディオ代表取締役社長、名古屋学芸大学大学院教授で、世界のインクルーシブデザインの第一人者のひとり。

筆者は講演者の選定に関して、“ユニバーサルなまちづくり”に関して、これまでのIAUDの活動の枠組みを超える方向性の提示、EXPO2025に繋がる相関性などを鑑み、①従前からのIAUDの枠組みから着実に次代UDと街づくりを語れる演者、②EXPO2025にむけた大阪都市計画とインクルーシブな街路づくりが語れる演者、③デジタルメディアやDXなどSociety 5.0(EXPO2025のいのち輝く未来のデザインのSGDsとは異なるもう一つの方向性)とインクルーシブアクティビティの実装に関わる演者、④伝統文化からおもてなしや心配り(できるだけ多くの人への心配り)を長い歴史や立ち居振る舞いから語れる演者として、数十人の候補から、建築家・東洋大学元教授川内美彦氏、阪急不動産の松田圭洋氏、パノラマティクス齋藤精一氏、華道家元池坊の次期家元池坊専好氏とした。

建築家・東洋大学元教授川内美彦氏は、日本におけるUD・インクルーシブデザインの第一人者で、IAUDのプログラム“UD検定”を古瀬IAUD理事長、川内氏、筆者で教科書の編纂と検定時の講義を分担して行っている。街づくり設計では2020の国

立競技場のUD監修、セントレアAPのUD監修など多くのUD実績を認めることが出来、筆者が開発した錦城護謄(株)「HODOHKUN Guideway」(2016年度iFゴールドアワード受賞)の視覚障害者歩行誘導ガイドに車椅子利用者の観点から監修を頂いている。

UD・インクルーシブデザインを論ずるとき、専門家としてどうしても外せない一人で、当事者参加のまちづくりの重要性をご自身の経験から、セントレアAPや国立競技場などの設計を通して語って頂きEXPO2025の目指すべき方向性を、“TKYO 2020 アクセシビリティガイドライン”を基に教示して頂いた。

阪急阪神不動産の松田圭洋氏は、ユニバーサルな都市計画実務者として、梅田ツインタワーズの設計を口述して頂いた。筆者は、阪急阪神不動産(株)のUDまちづくり調査研究を10年来受託しており、“梅田MAG”“梅田マルシェ”“梅田サイン計画”などUD・インクルーシブデザイン評価検証や阪急阪神グループ対象のワークショップを実行してきている。

その実証を踏まえて、2022年3月にオープンした“大阪梅田ツインタワースサウス”に、歩道のUD化、地下・地上・オープンデッキの三層の快適・利便な歩行者空間づくりを実現している。ビル自体は、阪神百貨店とオフィスビル、多くの多目的共有スペースなどを有し、闇市の時代から混み合っとして大阪市、阪神電鉄、阪急電鉄、JRに細かく区切られ管理されていた梅田サウスエリアを、シームレスなアクセスを可能にした都市ゾーンに生まれ変わり、多様性の容認を実現した。

パノラマティクス齋藤精一氏は、日本を代表するメディアート作家であり、パノラマティクス(旧ライゾマティクス・アーキテクチャー)を主宰している。齋藤氏は、建築デザインをコロンビア大学建築学科(MSAAD)で学び、2000年からニューヨークでアーティスト活動を開始し、メディアートを取り込んだ街づくりを先駆けて推進してきた。パノラマティクスは、メディアアートをを用いたインスタレーションや宣伝、建築・都市開発などを手掛け、ソフ



図1. オンラインセミナーの様子
(IAUDニュースレターvol.14 No.9 2021.12より)

トウェアによるまちづくりを生業としている。同業としてチームラボやネイキッドがあり、筆者はそれぞれ仕事上のつながりがあるが、インクルーシブな街づくり観点からすると、パノラマティクスによる街づくりが秀逸なクオリティを追及しているとして齋藤氏にお願いをした。

街づくりのなかでどうしてもはずせないのが芸術文化であり、多様な個に対する心配りを行うことは社会的包摂と捉えて、日本の伝統文化のおもてなしの代表である華道の池坊専好氏(4代目)をUD・インクルーシブデザイン演者として招聘することとした。専好氏は、室町時代にその理念を確立させた日本で最も古い華道家元池坊の次期家元継承者で、EXPO2025理事・シニアアドバイザーを務める。いけばなは、自然や草木との対話の中で生まれる精神性そのものがおもてなしであり、いのちを慈しみ、人を大切に敬い心配りすることを磨き上げる文化である。

筆者は専好氏に以前街づくり特別講義を依頼し、秀逸な内容であったことと華道の心配りは、インクルーシブな要件を有し、UDの社会実装と捉えることができると感じていた。筆者の前勤務先で学位(博士)を取得されたこともあり、依頼には快く受けて頂いた。

◆講演1: EXPOに求められるユニヴァーサルな街づくり／川内美彦氏(アクセシビリティ研究所主宰)

アクセシビリティ研究所主宰川内美彦氏は、日本のUD研究の第一人者で、2018年まで東洋大学教

授、一級建築士・工学博士として、だれにも使いやすく、安全な建物やまちづくりについて多くの研究成果を発信し様々な貢献を果たしている。2000年「ロン・メイス21世紀デザイン賞」受賞し、最近ではTOKYO2020のオリンピック競技場のUD監修などの実績がある。

当事者の視点と建築家の立場から日本のUDを先導している川内氏は、UDの定義「可能な限り最大限に使いやすい」を実現した取り組みについて、2005年開港の「中部国際空港」などの事例を紹介した。また、現在では国家の大事業にUDを標榜するのは必然で、UD実現には当事者参加の設計が不可欠という認識も共通になっていると指摘し、EXPO2025では2021年の東京オリンピック・パラリンピックで作成された「Tokyo2020アクセシビリティガイドライン」を基に、当事者参加によるワークショップで意見を肉付けすることが必要だと提言した。

◆講演2: 梅田1丁目1番地計画 大阪梅田ツインタワーズ・サウス“つながる梅田の中心”を目指した取り組み／松田圭洋氏(阪急阪神不動産(株)開発事業本部技術統括部)

松田氏は、阪急阪神不動産(株)開発事業本部技術統括部建築グループ兼開発推進部開発グループ課長で、商業施設、戸建住宅、マンションの不動産開発業務に従事しており、人、交通、ビジネスが交錯する梅田梅田1丁目1番地の設計プランニングを担当している。

この場所は、EXPO2025開催時大阪地域の最も人々が交錯し密なエリアとして予想され、インクルーシブデザインを導入し、駅と駅、駅と仕事場、駅と商業施設、駅と学校など様々なアクセスをストレスなく行えることを計画している。特に、2022年春完成予定の高層ビル及び周辺公共施設は、JR大阪駅南側に阪急阪神不動産が整備する開発事業「梅田1丁目1番地計画」と名付けられ、「つながる梅田の中心」を目指した取り組みとして、バリアフリー化による地下・地上・デッキレベルの3層歩行者ネットワークの強化や、地上38階建てビル

「大阪梅田ツインタワーズ・サウス¹³⁾」オフィスゾーンに多様な人の出会いを繋ぐ共有スペース「WELCO」設置、大規模な壁面及び屋上緑化で街中でも自然を感じてもらふ事例などを挙げた。

◆講演3：建築・都市と新たなコミュニケーション／齋藤精一氏（パノラマティクス主宰）

齋藤氏は、建築デザインをコロンビア大学建築学科（MSAAD）で学び、2006年（株）ライゾマティクス¹⁴⁾（現：（株）アブストラクトエンジン）を設立した。現在はパノラマティクスを主宰し、行政や企業などの企画、実装アドバイザーを数多く行っている。2025年大阪・関西万博People's Living Lab（未来社会の実験場）クリエイターとして建築で培ったロジカルな思考を基に、アート・コマーシャルの領域で立体・インタラクティブの作品を多数作り続けている。

齋藤氏は、共創しながら実証実験を通じて技術革新の促進をはかる「People's Living Lab」クリエイターとして、これからは大量生産・消費ではなくコミュニティに最適化する時代であり、今後は文化を中心とした街づくりが必要で、文化の周りに経済圏をつくり、それが共創・競争しながら拡大していくと指摘した。

さらに、ポストコロナではSDGsをよく考え社会的に行動しなければならないとし、EXPO2025ではヴィジョンを共有して実装できるアイデアを紡ぎ、世界が目指すべき社会を提示することが最大の目標であると述べた。

◆講演4：華道におけるもてなし／池坊専好氏（華道家池坊次期家元）

池坊氏は、華道池坊家次期家元、華道紫雲山頂法寺の副住職。アイランド共和国名誉領事。博士（京都工芸繊維大学）。2025年日本国際博覧会協会理事・シニアアドバイザー。「いのちをいかす」という池坊いけばなの精神に基づき、草木の命が作り出す姿を美しさの根源とし、草木が日々太陽や雨や風などに出会い、新たな姿へ変化することが池坊の心としている。また多彩な他分野とのコラボレーシ



図2 登壇者の様子
（上段 川内氏、松田氏、下段 齋藤氏、池坊氏）
（IAUDニュースレターvol.14 No.9 2021.12より）

ョンなどの活動も展開している。

EXPO2025 理事・シニアアドバイザーでもある池坊氏は、多様な人をお迎えする EXPO2025 とおもてなしや心配りの一助となる華道とのつながりについて触れ、いけばなにある自然や草木との対話の中で育まれる精神性こそがおもてなしであり、それはいのちを慈しみ人を大切にすることで、EXPO2025 のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」とも根本的に重なり合うと述べた。また、現代に示唆を与える一つのヒントとして、伝統文化である華道の根底にあるいのちへの敬意や畏怖、あるいは共生という思想を再考することも必要であると提言した。

◆パネルディスカッション：次代を拓くユニバーサルな街づくり～ポストコロナへの提言～ パネリスト：松田圭洋氏、齋藤精一氏、池坊専好氏、進行：中尾洋子氏（パナソニック（株）デザイン本部未来創造研究所）

中尾氏は、パナソニック（株）デザイン本部未来創造研究所ナレッジ&HCD推進課全社UD推進担当主幹で、2005年から家電のUD担当責任者として、様々な家電の多様性配慮に関わっている。2012年からはパナソニック全社のUD推進事務局として、B to C、B to B 分野も含めて推進する他、UDサイトでの情報発信や、社内外の講演等を通じてUD理念の普及にも努めている。筆者の企業活動

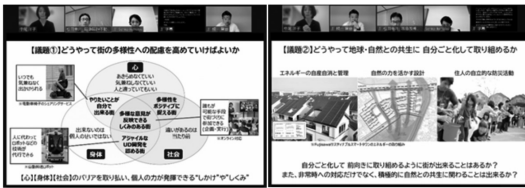


図3 パネルディスカッションの様子

(IAUDニュースレターvol.14 No.9 2021.12より)

の後輩にあたり、頼もしい人材である。筆者が企業時代日本で初めて1990年に企業内UDを標榜し市内組織と活動を開始し、筆者が退職してから中尾氏が引き継いで大きな活動に広げ業界の第一人者として活躍している。

中尾氏は先ず同社の神奈川県藤沢市との官民一体共同プロジェクト「Fujisawa サステイナブル・スマートタウン¹⁵⁾」を紹介し、1,000世帯3000人が住まうスマートタウンとして住人のくらし起点の街づくりを紹介し、コロナ禍では自動配送ロボットの実証実験やオンラインでのコミュニティ醸成活動などを実践したと説明した。

続いて、2つのテーマ「ポストコロナでは多様性に配慮した街が強みになるが、どう配慮を高めていけばよいか」「ポストコロナでは地球・自然との共生も真剣に考える必要があるが、どう地球・自然との共生に自分ごと化して取り組めるか」について議論が行われた。3人のパネリストからは非常に有意義な意見や提案が多く述べられ、大変充実したパネルディスカッションとなった。

6 まとめ

これまでIAUDの活動は、多様性の容認やインクルーシブデザインと標榜しているにも関わらずどちらかといえば、会員に向かっての国際会議やイベント、情報発信に注力し多くの人々が関心を寄せるテーマ論議をやや控える傾向にあった。勿論会員のための活動が第一義であるのでそれも当然であるが、今回はオープンセミナーを開催し会員以外の街づくりに関心がある参加聴講者に幅広く成果があった。掻い摘んで触れてみる。

川内氏は、UD・インクルーシブデザインを論

ずるとき、専門家としてどうしても外せない一人で、当事者参加のまちづくりの重要性をご自身の経験から、セントレアAPや国立競技場などの設計を通して語って頂いた。EXPO2025の目指すべき方向性は、“TOKYO2020 アクセシビリティガイドライン”を基に研鑽するという観点はとても納得性が高い。

松田氏には、地下鉄、JR、複数私鉄の巨大鉄道ターミナル梅田に、ショッピング、ビジネス、通学など多くの利用者が混在する梅田サウスエリアのインクルーシブ街づくりの成果を教示して頂いた。

筆者が、“梅田MAG”のワークショップを始めたときは、街なかの行先サインをひとつとっても多様でバラバラ、情報の表現がまちまちなど混迷そのものであった。本具体説明により大規模都市開発を行い、根本的な解決の方向性やその成果を多くの方々に共有することが出来、UD・インクルーシブデザインで街は生まれ変わり昇華できることを示して頂いた。

斎藤氏には、自らのプロジェクト芸術祭「MIND TRAIL (マインドトレイル) 奥大和 心のなかの美術館」、自らのグッドデザイン副委員長としての2021年金賞「遠隔勤務来店が可能な『分身ロボットカフェ DAWN ver. β』と分身ロボット OriHime」を通じて、DX時代の個がつながりコミュニティをネットワークしていく新しいデジタル街づくりとインクルージョンに関して言及した。デジタルアートから地域おこしや街づくりを行い、ソーシャルインクルージョンをいともスマートにやっている事例でとても参考になる。

池坊華道は、いのちや個を尊重し最大限の良さを発揮しながら周囲と調和し一瓶をつくりだすことを哲学としておりこのことはまさしくUD・インクルーシブデザインそのものであり、EXPO2025の“いのち輝く未来社会のデザイン”と重なり合いと示唆された。自然を敬い、自然を切り取り儚いのちの輝きを一瓶に表すことはいのちの敬意と畏怖、自然との共生社会環境との調和など、インクルーシブな社会や街づくりへの警鐘ともとれる示唆を提示した。

パネルディスカッションでは、異能の架橋で多くの課題が違う角度から語られ解決されるという最良の事例を提示できた。ポストコロナのユニヴァーサルな街づくりは、多様で多元な価値、知を共有し、独立しているいろいろな専門性、創造性を架橋し、都市計画、DX、芸術文化とインクルーシブな生活創造を有機的に、柔軟にネットワークして共有していく事が、ポストコロナの持続可能な社会を構築し、イノベーション創出に繋がると感じた。

EXPO2025“共創パートナー”(EXPO2025“共創チャレンジ”)から発信した今回のセミナーには、日本全国から多くの参加があり、登壇者からは、ポストコロナ時代のEXPO2025へ向けて街はどのように変化していくべきか、さまざまな角度から貴重な提言があった。

近年、IAUDは准学会として、より高い専門性の論議を中心に活動してきている。一方でより広い視点からの論議に陰りがあったと改めて感じた。

参加者からも、「非常に先進的なお話を聞くことができた」「中身の濃い充実した内容だった」など大変高い評価を頂いた。このことをもう一度よく捉えなおし、多様な生活者目線の立場を堅持し、より広い協力者の支持を得て前進していくことの重要性に気づかされた。

本年度IAUDは、Dハッカソン・アイデアソン、EXPO2025に向けた子供UD現場教育プログラムにとりかかっている。これまでIAUD会員やUDの理解者、応援者と関わった活動を社会に落としこみ、インクルーシブな街づくり支援者を拡大していく。

IAUDはこれからも“共創パートナー”とたゆまない共創関係を堅持し、SDGs達成に貢献し理想のインクルーシブ社会を実現するためにさまざまな活動を実施していく。

注

- 1) Universal Design
- 2) Inclusive Design
- 3) North Carolina State University
- 4) NCSU教授、建築家、プロダクトデザイナー、ユニバーサルデザイン(UD)という言葉を発信。

- 5) Royal College of Art
- 6) RCA名誉教授、Helen Hamlyn Research Centを設立しInclusive Designを訴求した。
- 7) International Association for Universal Design
- 8) ホームページ参照 [<https://www.iaud.net/>]
- 9) ホームページ参照 [<https://team.expo2025.or.jp/>]
- 10) ホームページ参照 [<https://www.expo2020dubai.com/>]
- 11) ホームページ参照 [<http://www.tourismforall.eu/>]
- 12) 「ハッカソン(Hackathon)」とは、ハック(Hack)とマラソン(Marathon)を掛け合わせた造語。デザイナー、プランナーなどがチームを作り、与えられたテーマに対し、アイデアを持ち寄り、短期間に集中してソリューションやアプリケーションなどを開発、成果を競う開発イベント。IAUDでは、48時間デザインマラソンにあたる。
- 13) ホームページ参照 [<https://www.hanshin.co.jp/twin-south/>]
- 14) ホームページ参照 [<https://rhizomatiks.com/>]
- 15) ホームページ参照 [<https://fujisawasst.com/JP/>]